展 景

季刊

No.66

2012 年 6 月 28 日 発行

通巻第 66 号　オンライン版 第 6 号

無二の会

muninokai.com

季刊　展景　66号

目次

命の芯〈短歌〉……布宮慈子　3
牡丹の寺〈短歌〉……丸山弘子　4
冬芽の記憶〈短歌〉……結城　文　5
癒えざる傷は〈短歌〉……池田桂一　6
花の町〈俳句〉……岩田都女　7
仔犬〈短歌〉……小野澤繁雄　8
山ざくら〈短歌〉……河村郁子　9
東京歌会（第二十回）……10
近江気まぐれ文学抄35　永田和宏・河野裕子『京都うた紀行
――近現代の歌枕を訪ねて』……新関伸也　11
叶えられた望み……松井淑子　13
〈那須通信11〉夕方に……加藤文子　14
対詠　ごきげんいかが？PART 42……小野澤／布宮／丸山　16
前号作品短評A……17
前号作品短評B……18
「清紫会」だより……19
エッセイ教室「清紫会」の作品より
歌声を残して……市川茂子　20
ありがとう……大石久美　21
信濃……小野澤繁雄　22
無二の会　短信……23
編集後記……25

命の芯

布宮慈子（やすこ）

ゆるやかな蔓のアケビは妖しきまで深紅の小花つけてゐるなり

憶へなき黄色のふはふは咲きてをり兄の植ゑたるマンサクの花

いつせいに花咲き満つる山形もセシウムの値と無縁ではあらず

身にふかく雪の記憶が刻まれてTシャツ着るをためらひてをり

朝日背負（しょ）ふ蔵王の峰は青くして命の芯をみつめて暮らす

飼ひ猫の一挙一動みてをれば十一歳の大人の顔する

小刻みに手足と耳を震はせりワインの栓を追ひかける夢

中村屋のバゲット掲げ軽やかに渡り終へたりゼブラゾーンを

ある時はすがるやうに歩きたり祈りにも似て抱くバゲット

そは雪菜（ゆきな）、紅菜（べにな）といふ初めての菜を購（く）ひ来季節季節に

牡丹の寺

丸山弘子

低気圧の激しき風をしのぎきり若木のさくらせいせいと立つ

ブロック塀を覆ひ華やぐ黄のバラに予報通りの強き雨降る

澱みゐる池なれどほとりのイチハツに寄り添ひて椋鳥（むく）の番きてゐる

公園の桜古木に洞ありて実生の棕櫚の大きく育つ

巣づくりのためならん棕櫚の毛ひきむしり嘴に溜めをり雌雄の鴉

開発のすすみゐる中野駅ちかく大学二棟競ふがに建つ

聞きなれぬ電話の声にフルネーム言はせて甥の息子を認む

店の主人健在なるを確かめて充電クリーナーの注文をする

母の介護のための退職告げに来し女（ひと）思ひをりハイビスカスの花

ことし最後の花見んと来つ禅定院の山門の辺の牡丹ひと叢

冬芽の記憶

結城　文

春暁のまぶた重たく寄りし窓もはやどうしてもと思ふものなく
芍薬の芽はひしひしと赤くして冷たき風のなかに直ぐたつ
萌え出でし赤き芽みどりに移ろへる日々なり定めもあらぬ思ひの
天窓に雪のつもりて常よりもをぐらきしじまブレイクを読む
部屋隅に止りしままの置き時計しづかに祖父母の記憶眠らす
ペンとりて向かふ机にひらかれよほつほつ冬芽のやうなる記憶
もう一人芽ぐみそめたる私つれ旅だちゆかむうす雲の空
国境も区切りもあらぬしののめの空に含羞のごときくれなゐ
わがうちに生まれし悔いの芽片空の黒雲となりじょじょにひろがる
神あらぬ真昼の街のゆるき坂ぬるま湯のごとき風に吹かるる

癒えざる傷は

池田桂一

大地震に外れし障子戸その位置に破れたるまま片付かずあり
石垣も蔵の損壊も目の前にそのままに置く覚悟を決めて
降る雨に剝がれ落ちたる漆喰の蔵壁は縄目を新たに見せり
震災の傷跡深く建つ蔵を避けて通りぬ無意識にして
また余震　声を挙げるも席を立つ気配なくして振り向けば笑む
まだ続く余震に怯えることもなく膝に居る猫に声かけながら
水張田の続ける中に耕さぬ田の目立ちたり五月になりても
放射能汚染避けんとハウス建つ　風評被害のゆえなりと聞く
放射能数値を朝毎記録する借り受けし線量計七日ばかりを
繰り言に気付けば己の言葉さえ虚しくなりぬ原発事故の

花の町

岩田都女

観音堂とお社在られ花の町

御移りや漆の器にさくらんぼ

ゆく春や蓋の吸ひつくお吸物

遡る事を知らずや花筏

花筏いくつの橋をくぐりきし

桜蕊（さくらしべ）髪結ひたての妻に降る

をさなごの手のひら八つ手の若葉かな

蓬摘む父に似し親指の爪

聖五月鍔広帽子のリボンかな

念願の本出せにけり五月富士

仔犬

小野澤繁雄

農園に再び人の姿増ゆモビールのごとき風車鳴り

桃色とピンクのちがい通りっぱたリリーハウスの調子ピンクか

生れこん仔犬もらってとその母はティーカッププードル父ダックスロング

われよりも怪しそうなる灰猫がわれを疎みて後じさりしぬ

校庭は舞台のごとくやや高にまだ十代の声々聞かす

本箱に小型の絵本並びいて小児科中待合子の姿みず

要領をえぬやりとりが待合の通り貫き耳遠き人

「昨日より晴れず上らず強まらず」女性キャスター少し遊んで

畑々に庭のごとくに花植えて楽しむ家あり余したる畑か

塀だけが立派なる家塀もまた立派なる家となり同士に

山ざくら

河村郁子

ひところの散歩に出会いし山ざくら犬亡きあともしげく通い来

練馬区の指定名木おおどかに枝を広げて高さ十五メートル

根本より四方に幹を分かちいて調和たもてる天与の樹形

見あげいる卯月はじめの山ざくら枝くろぐろと開花未だし

訪ねこし卯月なかばの昼さがり　山ざくら花咲き満ちており

ひととせの集成として咲き盛る山ざくら樹の格調賞でる

穀雨ちかき雨降りそそぐ雑木（ぞうもく）の林しずもり人影もなし

木下より見上げる吾を幾重にも桜の花が包みくれいる

開花より十日余りの山ざくら散りて広ごる片（ひら）のかがよう

世の誇る第十六代桜守　御名はなぜに佐野籐右衛門

東京歌会（第二十回）

平成二十四年二月十六日（木）。会場は、文京シビックセンター三階B会議室。詠草は、各二首十首。出席者は、ゲストを含む六名（池田桂一、大石久美、小野澤繁雄、林博子、丸山弘子、松井淑子）。

・なつかしき寒さと思う土手をきてその砂利石の互いに凍る　小野澤繁雄

寒さはことしの冬の特徴で、寒い冬は過去にあった。そこからのなつかしさ。下の句が判らない、という声あり。土手の道に砂利石が敷かれ、その石同士が、というところが説明されていない。

・青春は迷っていても良かったが年歯かさねて決断あるのみ　河村郁子

同感の声あり。好評。上の句からは、よくしられる歌謡曲が連想された。年歯かさねて、は、齢（よわい）かさねて、くらいでいいという。年歯（端）、は年齢の意味の漢語。年歯（端）の（も）行かぬ（子供）、のように使われる。

・ラジオよりきこえるクイズに聴き入りて頭をはなれぬ言葉に惑う　池田桂一

こういうことはある。頭をはなれぬ言葉、には、何か切実なものが思われるが、どんな言葉かはしらずともよい。惑う、は、クイズ（の答え）に惑う、頭をはなれぬ言葉に惑う、と両義的だ。

・放射能にまみれし国土から見ても冬空にある星の輝き　布宮慈子

国土という把握が、今やオーバーでない状況だ。下の句の平凡さにもかかわらず、平凡でない対比になっているところが読みどころ。

・認知症の進行あきらかな弟よ名前書けぬと電話かかり来　丸山弘子

現代的で切実な内容。この辺の事情は作者のエッセイでもしるところ。歌は簡潔に姉弟の関係性も示す。歌に合う内容、といういいかたが適切であるか。

・猫棲まぬ街となりたりマンションとマンションの間　風の折れゆく　大石久美

風の折れゆく、の前一字あけ。あけなくともよいかもしれないが、その場合漢字が続く。作者当日持参の歌。好評。現在を映す都市詠のひとつか。そういう街のマンションのひとつに作者も住む。風の折れゆく道を、作者もまた、折れゆくのだ。

（小野澤）

永田和宏・河野裕子
『京都うた紀行――近現代の歌枕を訪ねて』

新関伸也（にいぜき）

たとへば君　ガサッと落葉すくふやうに私をさらつて行つてはくれぬか

『森のやうに獣のやうに』河野裕子

たつぷりと真水を抱きてしづもれる昏き器を近江と言へり

『桜森』

手をのべてあなたとあなたに触れたきに息が足りないこの世の息が

『蟬声』（絶筆）

河野裕子が「たとへば君……」を『森のやうに獣のやうに』で発表したのが京都女子大学在学中の二十一歳の時であった。また、『桜花の記憶』によって第十五回角川短歌賞を戦後生まれで初めて受けるなど、若い頃から注目を集めた歌人である。その直感的で若い女性の身体からほとばしり出たような生命ある青春の歌は衆目を集める。そこでは、永田和宏との出会いに始まり、恋に揺れ動く日々が、みずみずしい率直な感性で詠まれており、冒頭の歌は国語の教科書にも紹介される代表作となった。

やがて二人は結ばれるが、河野裕子は妻として、また母として二人の子どもを育てながら、歌人として短歌結社「コスモス」や「塔」を中心に積極的に活動を続けていく。一方、夫の永田は、京都大学で細胞生物学の研究者生活を続けながら、歌人として「塔」短歌会を主宰し、二足のわらじの生活を続ける。夫婦共に「斎藤茂吉短歌文学賞」を受賞し、また宮中歌会始詠進歌選者となるなど、日本を代表する夫婦歌人となった。しかし、平成十二年に裕子の乳癌が見つかり、病と向き合いながら仕事を続けていたが、乳癌の再発により、平成二十二年八月に死去する。享年六十四歳であった。「手をのべてあなたとあなたに……」の歌が絶筆となる。

この四十年余りの河野の歌詠みは、「君であり、あなた」である夫、永田和宏なしには成立しなかった。逆もまた真である。そのように考えると、歌人夫妻にとって出会いから死別まで、歌の主軸となったのが二人の相聞であった。その相聞の在り方は、恋や愛に留まるものではない。生活を共にする夫婦や家族の些細な日常もすべて、相聞の源となりえたのである。

ところで、これらの二人の相聞の背景に、近江は欠かすことのできない原風景として存在した。河野は熊本で生まれたが、父の商売により六歳で滋賀の石部町に移り住む。小学校から大学途中まで父母と共に暮らした土地だけでなく、大学を卒業して結婚するまでの短い間、中学校国語教師として教鞭をとったのもこの地である。

そして滋賀を代表する歌として、河野が詠んだ「たつぷりと真水を抱きて……」は、近江を静かで暗い器としてとらえ、それは琵琶湖を入れているからという彼女の思いは、滋賀の風土を身体化していたからに他ならない。スケールの大きな秀歌である。

一方、永田家のルーツも湖西の高島郡饗庭村であり、幼くして病で母を失い、京都に移り住むが幼少期は琵琶湖を原風景として育っている。

この二人が京都と近江の歌枕を訪ねて、先人の歌と重ねながら詠んだ歌をこの書は紹介している。後半の「最後の対談」がまたこの二人の歌人の来し方を物語っている。河野はこの書の刊行を楽しみにしていたが、手に取ることなくこの世を去ることとなった。

叶えられた望み

松井淑子

竹輪麩が好きである。味らしい味はしないのだが、あのもっちりした、それでいてこちこちした歯ごたえがなんとも言えず気に入っている。うちでおでんを作るときには、絶対に欠かしたことがない。

むかし、会社の同僚と新宿あたりのおでん屋に入って、まず竹輪麩を注文したら、店の主人から、

「最初に竹輪麩や大根を注文するお客さんはこわい」

と言われたことがある。

竹輪麩や大根はそれ自体に大した味がないので、染みこんでいる出し汁の味の良し悪しがもろにわかってしまう、というのがその理由であった。

そう言われて、ちょっと気をよくしたものである。

竹輪麩といえば、必ずといっていいほど思い浮かぶ光景がある。それは、浅い楕円型の木桶に入った竹輪麩である。記憶にまちがいがなければ、たしか水に漬けてあったように思う。

あれは私が四、五歳のころだったか、夕飯の材料の買い出しにゆく母について、近くの市場にいったときのことである。その市場は、ひとつの建物の中に八百屋、魚屋、肉屋などの食料品店から荒物屋、小間物屋まで、いろいろな店が雑居しているいわば小型の商店街のような所で、竹輪麩の木桶は、そのうちのどこかの店先に置かれていた。

私はそれまで一度も竹輪麩を食べたことがなかったのだが、見た途端に、なぜかもちもちこちこちした食感が想像され、そのことを確かめるためにも、ぜひとも食べてみたくてたまらなくなった。そこで母にねだったところ、

「あんな物、食べるんじゃありません」

と一蹴されてしまった。

母に言わせると、あれは単なる小麦粉の固まりのようなもので、おいしくもなんともない、というのである。私はがっかりすると同時に、大人になって自分でなんでも買い物ができるようになったら、必ず竹輪麩を買って食べてやるぞ、と思ったものであった。

子供時代、どの子供も多分そうに違いないが、私もまた、大人になったらああしたい、こうしたい、という小さな望みをたくさん抱えていたものである。それらの望みがどんなものだったか、そして叶ったか叶わなかったか、今となってはまったく覚えていない。

だがそんな中でたった一つ覚えており、叶えることができた望みは、自分で竹輪麩を買って食べる、ということだけである。

〈那須通信11〉

夕方に

加藤文子

台風が近づいている。雨が降ったり、やんだり。風も時々強く吹く。

夕方急用ができて、休みだったアシスタントのYさんが雨のなか来てくれた。用事が済んだ頃には雨がやみ、空が明るくなる。

Yさんを送り出した時、盆栽たちを避難させた庭の片隅に光が射(さ)しているのが見えた。そこは、三方をコンクリートの壁で囲んだ三和土(たたき)の空間、屋根もあるので台風や大風が吹いた時など、避難場所にすることが多い。

柔らかな光が、盆栽たちの上方を撫でるように巡る。風もなくあたりも静かで、台風などよそ事のような心地で、光に映し出された盆栽たちの様子に見とれていた。

中でもひときわ目をひくのは、カーブを描いて伸びた茎の上で咲くユリの花。フォーカスされたように、白くくっきり浮かんで見える。そのぬけるような白さに誘われて、カメラを持ち出してシャッターを切る。

カメラを抱えてもっと近くへ、もっと寄って……と、その時である。蟻の行列がユリの咲く野草に続いているのが目に入る。

サァー大変。野草の叢(くさむら)をかき分けてのぞいてみると、蟻の大群が表面を覆いつくしている。

数分前の夢のような気分は、一瞬の間にかき消されていた。昨日、表の棚から移した時は蟻の気配はなかったのだけれど、それとも気がつかなかったのか。いずれにしてもユリの花が呼んでくれなければ、もっと事態は深刻になっていたはずだ。幸いにも、テレパシーのようなものが働いたのだろうか。目には見えない不思議を思った。

仕事場で蟻の処置を終えて間もなく、再び雨になった。

対詠　ごきげんいかが？　PART42

O　小野澤繁雄
N　布宮　慈子
M　丸山　弘子

気がつけばみどりが川に映るみゆあたり水増ゆ土手の内外　3月21日　O
青空に屋根の雪減り雨樋を伝ひ流るる水の音きく　3月28日　N
春のそらの荒れんとするや窓占めて雲の流れの暗に傾く　3月31日　O
国井家の「次郎左衛門雛」まろし春の訪れ告げるひな市　4月2日　N
メモリアルホールに隣る結婚式場若き社員ら互いに似るか　4月4日　O
山形に鶯の声す東京の鶯と似るか訛りのあるか　4月12日　N
閉店後「テナント募集中」とありしかど日を置かずして解体し始む　4月15日　O
バギーより身をのり出して応へくる吾に気づきたる隣り家の孫　4月19日　M
生と死と隣り合はせの慈眼寺に梅と桜が共に咲きをり　4月27日　N
「昨日より晴れず上がらず強まらず」女性キャスター少し遊んで　4月29日　O
「ほんものの咲くまで」と言ひ門先のミニ菖蒲田に折り紙の花　5月5日　M
折り返して生きるらしいみづからの力でキャットフード舐めをり　5月9日　N
一本の横断歩道をそれぞれに渡るものかな斜めに彼女は　5月12日　O
予約したる特権なれどこころ痛し待合室の患者多くて　5月15日　M
「大丈夫。」観てきつ細谷先生も小児がんの子も共に耐へをり　5月19日　N
自転車の荷台の籠に運ばれてたよりきってる風情に犬は　5月26日　O
抜かなくてよかつたプランターの隅に小判草ふるふる揺れる　6月1日　M
雑草と見紛ふばかり種蒔きてやうやく出づるハーブのさみどり　6月7日　N
同僚の持ちて飾れるキショウブの足らぬ何なしに園を画像に　6月8日　O
水浴びをして来て鴉電線の高きにその水ふり落しをり　6月12日　M
水底の息苦しさを覚えたり原発再稼働を首相が決めた日　6月16日　N

前号作品短評A〈小野澤〉

●空耳か　胸の内より声がする「かあさん　ぼくはここにいますよ」　河村郁子

この歌にきて、ハッとした。タイトルは「ペットロスタイム」、その三首目なので、読み誤ることはないにしても、それにしても、作者の思いはエッセイなどでもしり、それなりに判っていると思っていたところ。これほどとは思っていなかった。次のような二首目、四首目の歌も、連作の外に置いたら、読みに迷うところかもしれない。

骨壺の失せたる部屋の虚しさに手当りしだいの写真を飾る

「ただいま」と言っても壁がはね返す吸い込みくれし耳はもうない

この後者の歌、結句「耳はもうない」に耳の位置の低さが少し感じとれた。

●赤白の鉄塔あまた並びをり東京へ東京へと続く高圧線　布宮慈子

赤白の鉄塔は、紅白鉄塔で検索すると、航空法上の規定から、一定の高さのある鉄塔らしいが、しらないほうが楽しかった。じぶんも歌にしたことがある。

七番目に女の子鉄塔がきて紅白の鉄塔はわれがしか呼ぶ（拙作）

電力事情はもう明らかになったので、下の句のもつ意味もハッキリしている。

一首目、「晴天の山形いでて吹雪たる峠の駅を越えればふくしま」。山形と福島の位置関係だが、群馬出身のボクには、上越、信越という関係に類比される。ようするに峠、で天気もそこで分断された。福島の人は多く山形に避難しているらしい。ふくしま、がひらがなで、山形、が漢字表記は現在的なのだ。

●焼夷弾落ちしことなど知る人のなけん跡地に家建ちならぶ　丸山弘子

十首作題は「焼夷弾」。前半六首が、関係する歌。

五首目の歌は「いまも住む隣組たりし石原さん当時の表札そのままにあり」。隣組というコトバは廃れたかもしれないが、記憶は残る。当時を知るから、当時の表札そのまま、と言うこともできる。

アラジンのストーブいまも恋しきよ豆煮る匂ひ湯の滾（たぎ）る音

アラジンのストーブ、たしかに懐かしい。同時に、そんなに古すぎもしない、と思った。

はつ雪は積らずシャーベット状のまま雪かきの労なきを喜ぶ

これは、よく判る。はつ雪にしてもうこんなことを考えている、ということ。

前号作品短評B〈慈子〉

●身の近く犬猫がゐて鳥のゐる街にひと日ひと日のゆきかひ　結城　文

三十余年、同じまちに住んでいるという作者。過ぎた年月は一日一日の積み重ねであり、その連続で成り立っていることを改めて思ったのだ。そこに作者の感慨の深さがあって、共感をよぶ。犬や猫、鳥と暮らした日々を懐かしく思い出している。六首目、「三十余年住みしこの地はデラシネの東京生まれのわれのふるさと」では、デラシネ（根なし草）ということばが、すでに古風な響きをもっているので、二重に時間の経過を感じさせる表現となった。「三十分に一本だつた西武線今では数分の間隔で走る」は、隔世の感ありの現実を示す。

●窓際の尺余の氷柱（つらら）この冬はまだまだ伸びる二月半ばに　池田桂一

題の「もう一年」は、「もう一年たったが……」ということだろう。福島県の最北部に住む作者の悲痛な思いが吐露された一連である。震災から一年過ぎたのに、地震で壊れた壁や蔵屋根、石垣はそのままで、修復できる見込みもない。不安定な生活は相変わらず続いている。諦めざるをえないことばかりの日常は、ひとの精神を疲弊させていく。そのなかにあって、掲出歌はシニカルだが少し救われる。氷柱がもっと伸びるのは寒さが厳しいからだが、それを楽しんでいるかのような客観的な表現だ。八首目の「まるき穴空のぞくがに見上げれば瓦抜けたる蔵屋根はある」も突き抜けた明るさを感じる歌である。

●ぐい呑みに喝の一字や春の雷　岩田都女

勢いのある句である。「喝」と「春の雷」とで勢いが増幅されるあたり、評価が分かれるかもしれないが、ここまできっぱりした表現は、やはり魅力的である。雷が鳴るのは季節の変わり目に多い。冬から春への変化が、徐々にではなく一気に進む様子をあらわしているのだろう。「大瑠璃の裾よりくもり雪予報」も観察眼のひかる一句。また、結婚式の様子を詠んだ次の句はあたたかい。「神のもと交すリングや暖炉燃ゆ」「ケーキカット編込みセーターお揃ひに」。

●切株がもちうる意味のひとつにて「切株注意」小学校通りに　小野澤繁雄

切株に特に意味はない。しかし、「切株注意」と書かれた時点で意味をもってくる。言われてみれば、という感じ。記号論をもちだして論ずるほど詳しくないのでやめておくが、まさに理屈の歌である。作者の真骨頂といえようか。湿度をもった歌の対局にある、覚めた歌い方。好みの問題だが、評者はわりあい好みである。一首目「並みゆくは孫か」、二首目「鮮明なるや成人われら」、六首目「冬に入りたるか」、九首目「朝を仕分けしいるや」と軽い疑問形にした歌が多かった。

「清紫会」だより

◆第92回　平成二十四年二月十六日（木）、会場・文京シビックセンター三階B会議室
〈提出作品〉池田桂一・無題／大石久美・ありがとう／小野澤繁雄・川のほとりで／河村郁子・総合判定は普通／林博子・トンネルの向こう／松井淑子・ほくそ笑み

◆第93回　三月十五日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室
〈提出作品〉市川茂子・歌声を残して／大石久美・静江さん／小野澤繁雄・信濃／河村郁子・姉の事／林博子・女ごころ（私のお雛様へのオマージュ）／松井淑子・叶えられた望み／結城文・二度目のインド

◆第94回　四月十九日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室
　会員の顔ぶれがそろい、そろそろ会を始めようと思っていたところに、思いがけず外山滋比古先生がご入来になった。一同大喜び。これまでと変わらずに作品の指導をしてくださる。会のあとのお食事もご一緒した。
〈提出作品〉大石久美・A子の死／河村郁子・ヤマザクラ／林博子・黄色いカラス／松井淑子・ノビルの話／結城文・コルカタの街で

◆会員の岩田トメさんがエッセイ集『おとめさんの思い出話――昭和から平成へ――』を上梓された。サブ・タイトルにあるように、岩田さんの個人的な思い出話を通じて、昭和から平成に至る激動の時代が透けて見える貴重な一冊である。
　たとえば、昭和十一年に軍の一部の将校らがクーデターを起こした二・二六事件の話。岩田さんは銀座の生まれで泰明小学校の出身であるが、その日、当時小学生だった岩田さんが登校したら、学校に武装した政府軍が駐屯し、憲兵が出張り、ものものしい雰囲気でこわかったとか。
　また、家族とお店の使用人たち全員で明石町の船宿から網船を仕立てて東京湾で遊んだ話、銀座の銭湯に入りにくる新橋の芸者衆の話など、古きよき時代の銀座に暮らす人々の生活がしのばれて興味深い。銀座に銭湯がたくさんあったこともオドロキである。
（松井）

エッセイ教室「清紫会」の作品より

歌声を残して

市川茂子

長年親しくしていた、近所にお住まいの小柄な可愛いおばあさん。ときどきご機嫌伺いに寄ると、家族の方は「少量ですが三食しっかり食べているので、百歳までは大丈夫でしょう」と言っていた。が、今年の大寒の最中に、老衰のため逝ってしまった。

生れ故郷は熊本。朝鮮の地で警察署長をしていた青年の希望は、小柄な可愛い人が好きだとのことで、その母親に見初められ、海を渡ってお嫁さんになったということだ。

外地での生活から、終戦となり引揚げてきて、郷里で不動産業をはじめる。四人のお子さんを育てながら、上京して今の地に店舗をかまえ、商売をした。ご主人に先立たれてからは、あとを継いだ息子夫婦や孫に囲まれて大事にされていた。

若い頃から歌が好きで、芸能学院に入って勉強したそうだ。その当時流行したレパートリーを色々と歌っている。「エイライシャン」「東京ラプソディ」などをチャイナドレスを着て公会堂の舞台で歌ったこともあった。

晩年は、町会の老人会やお祭り、地域のイベントなどでも、皆さんを楽しませてくれた。

ある時、お刺身にも熱湯をかけて食べているという話を聞いて、びっくりしたことがある。外地での生活からか生物は口にしなかったようだ。また、毎晩かかさずにボイス・トレーニングをして努力していたようで、上手な歌声を聞かせてくれた可愛いおばあさんだった。

足腰が弱ってきてからも、ドレスを着て周りの人に支えられながら歌いつづけてきたことが忘れられない。お棺には楽譜やチャイナドレスを入れてあげたという。花いっぱいの祭壇の中、九十五歳で旅立ってしまった。

ありがとう

大石久美

東京に珍しく雪が降った。窓の外を見ると、四、五センチ積っただけなので、今日の歌会に出掛ける事にした。最寄りの駅までは三十分足らずだが、タクシーで行こうと、タクシー会社に電話をかけた。いつも五、六分で来てくれるのだが、今日はいっこうに繋がらない。かれこれ三十分も電話をかけ続けたが、諦めて、思い切って徒歩で出掛ける事にした。

道路は既に雪掻きをしてあり、片側の道には陽が射しているので、ほっとして歩いていった。ところが駅に近い四辻に来て、そこら一帯が凍っているのに気がついた。水捌けの関係らしい。なまじっか一歩踏み出してしまって、そこからは、つるつる滑って全く歩けない。杖などはかえって滑り易く何の役にもたたない事に気がついた。

周囲を見まわしても柱一本立っていない。どうしよう此処まで来てと、ぼんやり立ち尽くしていたら、突然、右側に背の高い女の人が近づき、さっと私の腋の下に手を差し入れた。「ロータリーまで摑まっていらっしゃい」と、一歩踏み出したところ、反対側の道から通りかかった若い男の人が、無言で私の左から手を入れて身体を支えてくれた。

この二人に支えられてロータリーまでくると、「では気をつけて行っていらっしゃい」と女の人はくるりと背を向け、男の人は無言で大股に駅の方に去って行った。

咄嗟の事で、私は声が出なかった。また両方に支えられていたので、私は二人の顔を見ていない。

マンションとビルばかりの石の街。多分これから外で出会っても気付く事はないだろう。

私は二人の後ろ姿に深々とお辞儀をしていた。「ありがとう」と。

信　濃

小野澤　繁雄

出身が群馬という近しさ、また、東京でしりあった人からの誘いということもあり、隔月開催の長野歌会に昨年は三回出席した。大震災直前の三月、九月をはさんで、最後は忘年歌会、十二月だった。

会のあと飲むことになるので、このところ会場の長野市内駅至近に安いホテルをとってもらっていた。狭い部屋ながら信濃の草花の絵がかけてある。同宿の者で飲み物を一部屋に持ち寄ってなお深夜まで話に及ぶ、ということもできた。

会の前後の時間は、善光寺に参詣することになる。そういう街なのだ。山が近い。どの通りも、先で山につき入っている、そう感じられた。

翌日午前中は、つごうのつく数人で参道を歩く。足をのばして信濃美術館をのぞいたこともあった。大抵は店先で席があくのを待つが、決まった店でソバを食べる。そのあと、駅前の店で、銘々の鉄道の発時間までをおしゃべりする。空はどこまでも信濃の空だ。

昨年十二月は、帰路を新幹線でなく、しなの鉄道にした。

しなの鉄道「屋代高校前」駅名に高校前はめずらし
駅名はその通りとも田中駅小諸商業生徒らのりこむ

小諸で下車し、久しぶりに懐古園を往復した。風が出てきて、寒い午後となった。人は少なく、若いカップル、親子連れ（動物園があり、至近距離にライオンの檻もある）が少し。川には水門ができていて、その上流は、水豊かといったところ。しかし、園も街全体もひどく淋しい。夕暮れの駅は高校生の姿のみがめだつ。どの駅もそんなだろうか。

軽井沢で中継すると、ここは別な国にきたような雑踏で、地面よりも星が近いようだった。ライトアップやイルミネーションで輝いていた。その落差は、われわれが望んだものでもある。そんな思いがあった。

無二の会　短信

◆東長生会なる名前の地域会に所属している。以前、その前会長から、次期会長にと推されていたが、断ったことがある。それなら副会長で協力してください、とのことは断れなかった。ところが、新年度間近で入院し、この二月に急逝されてしまった。総会までは代行したが、身辺多忙を理由に、一軒先の若手のH君を推薦して、会長に納めることに成功した。しかし、行動力あるH君は引っ込み思案だった幼い頃とは大違いで、自分の趣味のスポーツ優先で、色々な開催行事が重なると、私を代行に引っ張り出す始末。予定がない場合には引き受けざるを得ず、副として残った目論見は見事に外れて、今では任期切れを心待ちにしているところである。　池田桂一

◆「せめて、トマトで」。心を燃え立たすには赤いものを。赤いシルクジャージのワンピース。シルクデシンのブラウス。カシミヤのセーター。イタリヤブランドの靴、バッグは赤が綺麗。イヤリング、指輪は小さなルビーが上品。どれも高嶺の花です。太陽の申し子トマトを食べると、すぐに心を点すことができます。トマトの王様、桃太郎トマトをお皿に。皮は半分まで刃をいれ、そっと、花びらを開くように先をピンと反らせると、少女の頬のようなトマトが覗きます。さっぱりと食塩にしますか。ドレッシングソースまたは、マヨネーズに芥子か胡椒をきかせますか。　岩田トメ

◆母はこの三月で九十歳になった。松戸の兄さんのところで、デイサービスに通う日々を送っている。群馬の母の家の片付けに、仕事を退いた兄さんが帰省するようなことをしていて、それに可能なときは、合流している。なかなかはかどらないが、いくらかでも片付くと、兄弟して少しうれしいのだ。　小野澤繁雄

◆家の近くに「田中山憩いの森」がある。街中の三千平方メートルほどの雑木林である。榎、橡などの大木の他に山桑、黒文字などや野草園もある。区の管轄であるが、ボランティアの他にはあまり知られていない。この中に山ざくらがあり、私の朋友である。四季折々に訪ねて話をする。今年も満開の時に会った。八日後に行った時には、若葉の樹になっていた。　河村郁子

◆山形の家のシャワーがちょぼちょぼで、ついに決心して直すことにした。また、屋根も塗り直さなくてはいけない。今年の大雪でけっこう痛んだようだ。費用がかさむが致し方ない。二十五年もするとメンテだらけである。自分のメンテも必要だとつくづく思ってしまう。今年はゆっくりと仕事をすすめたい。　新関伸也

◆玄関の電球がすぐ切れる。電球の取り替えは、いまや私には至難の業である。そこで電気屋さんに頼んでLED電球に切り替えてもらった。電気屋氏によれば、これなら一日十時間使っても十年はもつ由。これから十年というと、私の寿命のほうがもたないかも。　松井淑子

◆頼まれて小さなマンションの管理をしている。空室がなく修繕など特別なことがなければ、楽な仕事だ。しかし今回は困った。入居者に雨漏りがすると言われた。早速手当はしたが、れっきとした穴があってそれを塞いだからＯＫ、というわけにはいかない。しばらく様子をみてください、と業者に言われ心配している。

丸山弘子

◆モンゴルに、私が文を書いた初めての絵本が届いた。『くもくもぽんやさん』（岩崎書店）。5月10日ごろから書店に並ぶという。書店で見かけたら、ぜひ中を見てほしい。いのうえさんの絵に心が和むと思います。http://www.iwasakishoten.co.jp/products/4-265-07856-7.html

山内ゆう子

◆枯れ枝のそこここに、小さな突起が見えてきたかと思うと、次第に膨らんで緑になり、一日一日大きくなって、やがて葉の形をとる。「木の芽どき」というが、毎日変わるのを見ているのは、嬉しい気分とともに、後ろから追われるようでもあり、なにか落ち着かない。

結城　文

編集後記

◆五月、河北町谷地（山形県）のホールでドキュメンタリー映画『大丈夫。』の上映会があった。サブタイトルは「小児科医・細谷亮太のコトバ」。細谷亮太さんは長年、小児がん治療をしてきた医師で、細谷喨々の名で句をつくる俳人でもある。現在は聖路加国際病院の小児科部長、副院長。『大丈夫。』が二〇一一年第八五回キネマ旬報文化映画ベスト・テンの第一位になったこともあり、亮太さんの出身地である河北町での上映会となったのであろう。映画のあと、亮太さんと伊勢真一監督のトークもあった。

いま小児がんは七割から八割、治るようになっているということだ。しかし、二割から三割の子どもは亡くなっていく。やはり、つらい病気なのだ。つらいのは本人や家族だけではない。担当する医師も、かなりのダメージを受けながら医師としての職業を続けていくことになる。それは観ているこちら側にとって、新たな発見であった。医者もつらいのだ。

雛菓子の血の色医者をやめたき日　　喨々

映画のなかに亮太さんの父親の、いまは亡き細谷先生の姿があった。建て替える前の古い細谷医院と老先生が出てきたときには、思わずハーッという小さなさざ波のような懐かしさを抑えきれないという笑いが会場から起きた。

この場面から、わたしは一気にワープした。

高校受験の直前に風邪をひいてしまい、少し熱があった。心配した叔父が受験前日の夜、懇意にしていた細谷（老）先生の自宅に連れていった。制服を着て、ほとんど掛けたこともないソファというものに座り、緊張していた。そのころ、細谷先生はしっかり聴診器を当てる先生として、地域では好む人と下着を脱ぐのが面倒だと好まない人がいた。応接間での診察といえど、しっかりと聴診器を当てるはずだと思い、脱ごうとした制服のブレザーのボタンに目がいった。叔父も見た。一つのボタンだけが緑色の糸でくくり付けてあった。なんで緑色？　一瞬、頭が真っ白になった。母に言わず、自分で付け直したからだ。急に恥ずかしくなり、同時に不機嫌になった。その場面がありありと思い出された。

診察のあと、注射をしてもらって帰ってきた。翌日の受験は難なく終わり、合格した。注射のおかげなのか、頭が真っ白になる経験を前日にしてしまったからか、それはわからない。

映画が終わった。亮太さんと子どもたちのかかわり合いに感激しながらも、違う次元で、十五歳の自分がそこにいた。

（布宮慈子）

季刊 展景 66号

二〇一二年六月二十八日　発行

編集・発行人　　布宮慈子

オンライン版制作　堀　哲郎

無二の会・展景発行所

山形市上町二―一―七―二〇二

muninokai.com

Copyright©2012 MUNINOKAI. All rights reserved.